

繋いでくれたものを私も繋いでいきたいと感じた

戦争体験した世代も少なくなった今（それはそれで良い事でもあるが）、戦争での出来事、物、生活だけでなく、人そのものをおかしくしてしまう戦争のことを、生き延びた人が繋いでくれた事、そしてこれからもそれを繋ぎ、紡いでいかなければと感じる2本。特にドキュメンタリーと同時に上映する事でより伝わる。もっと広く繋いでいきたいなど。

今まで観た戦争映画とは全く違う

命継ぐは戦争に全く興味が無い現代の若者が、自分が生きていることの意味を考えるようになる。体験者の話は、ドキュメンタリーの紡ぎで深く掘り下げられており、語り部の方の語り口に引き込まれ、戦争の光景を想像させる。今まで観た戦争映画とは全く違う。リアリティが知識想像へと導かれた。命継ぐ、紡ぎを観ると戦争体験してない者に戦争をしてはいけないとただ伝えるだけではなく心に突き刺さる想像体験出来る作品だった。

今の人々に足りていないものを教えてくれる

今を生きる人々に足りていないもの、今を生きる人々が気づくべきこと、そして今を生きられることの大切さを教えていただきました。自分に何ができるか、そして何がしたいか、改めて問いかけていきたいと思います。

想いが無いと紡がれない

絆を紡ぐと私も、よくポストしてきたけど、とても繊細な一步一步。これは想いが無いと続かない。でも心が突き動かすような喜怒哀楽。それに触れたら生きていることに気づきます。皆様に観てほしいです。

戦争の体験談を残すことの大切さを知った

戦争を体験した方の話をきちんと映像として残しておくのは大切な仕事だと思う。東京大空襲を振り返る二瓶治代さんの“死者の顔の記憶でもある”という言葉は、壮絶な体験を話す責任感と苦痛を感じた。

救われたそして勇気をもらった

戦争を体験していない私は、ある施設で戦争体験の語り部をしています。映画を観て、若い方々が戦争をすでに歴史として捉えていること、そして関心が薄らいでいることを知ることができました。不安なのは戦争体験者がいなくなった近い未来です。体験していない人が戦争を語ることに批判はありますし、私自身まだ語り部として若いためか、「お前が戦争を語るな」と嫌な目で見られることもあり悩んでいました。「地元の戦争体験を語り継ぎたいがどうすれば良いか分からないし批判が怖い」と悩む大学生にお会いしたこともあります。でも、最後の二瓶治代さんの「映像などを通して語り継いでくれることがありがたい」という言葉に救われました。私たちが活動をすることで、それが反感だとしても、きっかけとなって戦争体験者が話す実際の映像を見てもらえればいい。戦争体験者の話を聞きに行ったり、オーラルヒストリーを見たり、映画を観たりしてくれればそれでいいと思いました。今回映画を拝見して、その気持ちを強く持てた気がしました。そして以前会ったきりになっていた戦争体験者の方々に、やはりもう一度会いに行こうと。もう時間がないとも思いました。本当に素敵な映画を、ありがとうございました。勇気をいただきました。